

シェイクスピアの作品が混乱した話

生誕450周年記念稀観書展示会へのいざない

奥 正敬

■はじめに

今年はいギリスの文豪ウィリアム・シェイクスピア (William SHAKESPEARE, 1564-1616) の生誕450周年に当たります。彼は生涯に37点の戯曲と2、3の詩篇を残したと言われていますが、それらが実際に彼の作品と見做されるまでに様々な曲折がありました。ここでは、その幾つかの現象を確認してみたいと思います。

■文芸復興と黄金の時代に生まれて

イングランドは1485年に薔薇戦争で勝利したヘンリー・チューダーがヘンリー7世として即位して絶対王政を確立し、安定した社会を築き始めました。シェイクスピアが生まれる79年前のことです。宗教面では1534年にカトリックがローマ教会と決別してイングランド国教会を設立し、文化面では文芸復興期にあつて舞台芸術が人気を得ていました。大衆の娯楽が少ないこの時代、俳優が言葉に身ぶり手ぶりを交えて表現してくれる演劇は文字が読めずとも楽しめる最大の娯楽でした。

さらに、1558年にエリザベスが女王に即位すると、国力の伸張と共に文化面でも華やかさが増し、まさに「黄金時代」が到来するのです。

シェイクスピアは女王が即位して6年後の1564年に、イングランドのストラットフォード・アポン・エイヴオンで産声をあげました。同地のグラマースクールでラテン語とギリシア語を学び、結婚をして1男2女の子どもに恵まれています。1590年を過ぎるとロンドンの劇場で働き、そこで役者になり、同時に劇作家としての活動を始めました。

■幅広い構想力で戯曲を創作

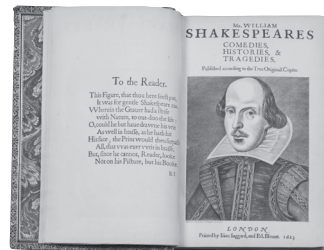
この頃の多くの劇団は地方巡業で細々と経営をしていたようですが、主要な劇団はロンドンなど大都市に本拠をおき、有力な貴族や政治家などの支援を受けていました。シェイクスピアが所属したのは「内大臣一座」で、この劇団に加わった1594年から翌年にかけて、『じゃじゃ馬馴らし』や『ヴェローナの二紳士』などの喜劇、『ロミオとジュリエット』や『タイタス・アンドロニカス』などの悲劇、さらに『ヘンリー六

世』や『リチャード三世』などの史劇を書き上げ、幅広い視野と感性を持った劇作家として認められるようになりました。

特に、前掲の『ヴェローナの二紳士』や『タイタス・アンドロニカス』などはその環境が外国に設定され、その後もヨーロッパの国々の話を扱った作品が作られます。これらは、自国の大衆が外国文化を知り得ることのできない時代に新鮮さを与えたもので、彼の人気が高まる要因の一つであったと考えられます。

■知的所有権の概念がない時代の混乱

シェイクスピアが有名になると、彼の作品の真偽を巡って混乱がおきました。これは当時の社会に「知的所有権」の概念がなかったことに起因します。この国では、著作権が認識される1710年の「アン・アクト」の成立まで書き手が権利を主張するという考えはなく、作品の印刷に関しても法的な権利にとらわれることはなかったのです。言い換えれば、書かれた作品は劇団のもので、書き手が多い劇団は多くの作品を持ち、印刷も自由に行えたのです。このため、実際にシェイクスピアの作品かどうか疑われ、また、誰が書いたかわからないものまで彼の作品とされることもありました。さらに、作品の創作年が不明なものもあり、当時の学術情報が錯綜することになります。



「ファースト・フォリオ」と呼ばれる初めての『戯曲全集』  
ロンドン、1623年。(本学図書館所蔵)

現在、彼の作品は史劇、悲劇、喜劇などを併せた37の戯曲と数点の詩篇があると考えられ、そのうち、彼の存命中に出版されたクォート(四つ折り本)①は18の戯曲と3つの詩篇と数えるのが一般的とされています。これらは、真偽を直接本人に確認できたと推測できますが、それでもこの時期に、彼の作品として刊行された偽作があります。

この時点で偽作と判断されたものを除いた残りの戯曲は、シェイクスピアの没後7年目にあ